断章

旭川のアイヌ語地名研究 ⑫⑦

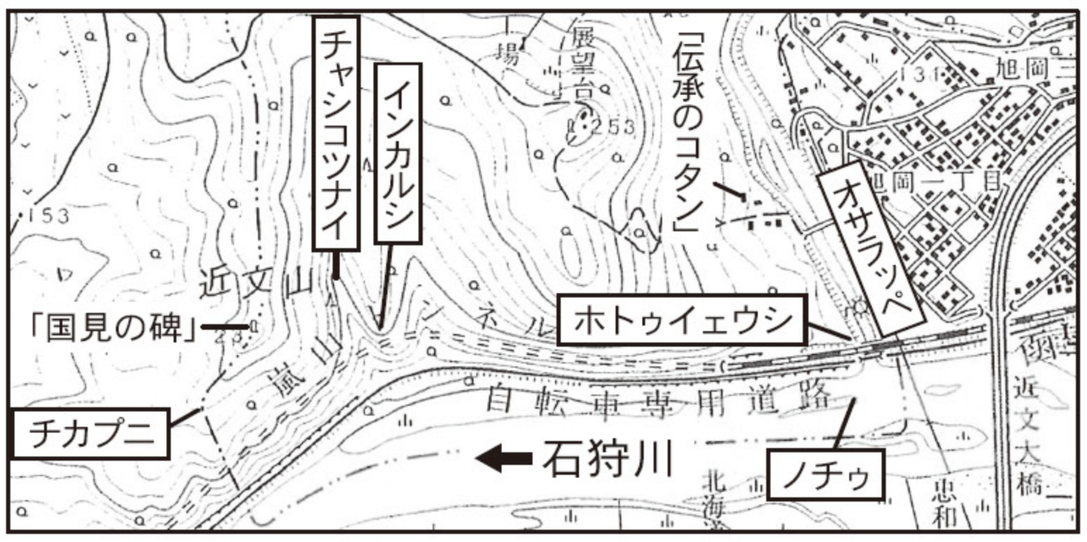
高橋 基

―伊野川から忠別川までの地名⑯―

これまで漢字地名の「近文」「鷹栖」の起源について、**掲載地図**の「**チカプニ**」の元になった、永田方正の『北海道蝦夷語地名解』(明治二十四年刊)の「**チカプニ**(chikapuni=chikap-un-i 鳥居ル処)―此ノ山ノ川ニ臨ミタル処ノ山面ニ大岩アリ。鷹常ニ来テ此ノ岩上ニ止マル。故ニ名ク。」を紹介した。

ところが、明治十八年八月に、**掲載地図**の「**近文山**」で「国見」をした、初代北海道庁長官になった岩村通俊は、自分が聞いたアイヌ語の「**チユッカブミ**」に「近文」の漢字を当て、これがその後、大地名に発展したことの謎解きも明らかにした。

今回は、右以外の次の①～⑤の伝承や、「**チカプニ**(大鳥の棲む木)説」の誤訳も提示して、まとめとさせていただく。



①―明治二十一年九月に、第二代北海道庁長官の永山武四郎が、上川検分をしたが、その時に同行した、『北海道毎日新聞』の記者・野中掬泉の記録をまず紹介する。

聞く、近文は、**チカップ**(アイヌ呼称)にして、鳥の義なり。古昔大鳥の鷲に似たるあり。常に此山に棲み、鹿の如きも容易に攫んで飛揚せりと。山を**チカップ**と名づくるは之に因る。(**写真**(1)『北海道毎日新聞』―明治二十一年十月十四日「上川紀行」)

⬇「近文」=「**チカップ**」…鳥の意味で、「鷹」ではなく「鷲」のような大鳥としているのが特色である。

②―明治三十年から三十三年まで、初代上川支庁長を務めた林顕三は、明治三十五年刊の『北海誌料』(**写真**(2))で、鷹栖村の村名由来を次のように記述している。

鷹栖村ハ原名**チカプニ**(今、音訳シテ近文ト書ス)ヲ意訳セシモノナリ。即チ**チカプニ**ハ大鳥ノ棲ム樹ト云フ意ニシテ、原野ノ中央ニ横ハル丘陵(今、称シテ高台ト云フ)ノ石狩川ニ臨ム処ニ老樹アリ。鷹来リテ常ニ此ノ樹上ニ栖メリト云フ。故ニ用テ村名トセリ。

⬇これは、**チカプニ**は永田方正と同一であるが、「**チカプ**(鳥)ニ(木)」と解釈し、「大岩」を「老樹」としたもの。

③―右の林顕三の『北海誌料』の影響力は強く、大正三年発行の『鷹栖村史』では、次のように変更踏襲されている。

ちかつぷにトハ、大ナル鳥ノ棲ム巣ノアル所トイフ意味ナリ。即チ近文台地ノ樹林中ニ、大ナル鳥ノ巣ヲ構ヘタルヲ視テ、此台地付近ニ命名シタルモノナリ。

⬇「大ナル鳥ノ棲ム木」の所在が、石狩川から離れて、近文台に変更されている。

④―昭和六年発行の近江正一著『伝説の旭川及其附近』では、「孔雀伝説」が登場する。

近文はアイヌ語**チカップニ**(孔雀の棲んだ山の意)より生まれた地名であるが、太古、非常に美しい夫婦の孔雀が今の近文山に住んで居た。附近に居住していたアイヌ達はこれを神として毎年祀つて居たが何時の頃からか居なくなった。アイヌは美しい孔雀を忘れる事が出来ず此の附近に**チカップニ**といふ名をつけた。だから単に近文といふのでなしに近文山と呼ぶ事が本当であるといふ。

⬇大きな鳥が、鷹・鷲ではなく、孔雀の夫婦として登場する。他にもう一話があるが、こちらは、大きな鳥が、鷲となっている。

⑤―昭和四十六年発行の更科源蔵著『アイヌ伝説集』では、④の『伝説の旭川及其附近』の引用であるが、「**チカップニ**(鳥のいる木)に改変されている。

以上が、「近文」「鷹栖」の地名起源説の代表的な例である。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

(1)『北海道毎日新聞』

(2)『北海誌料』